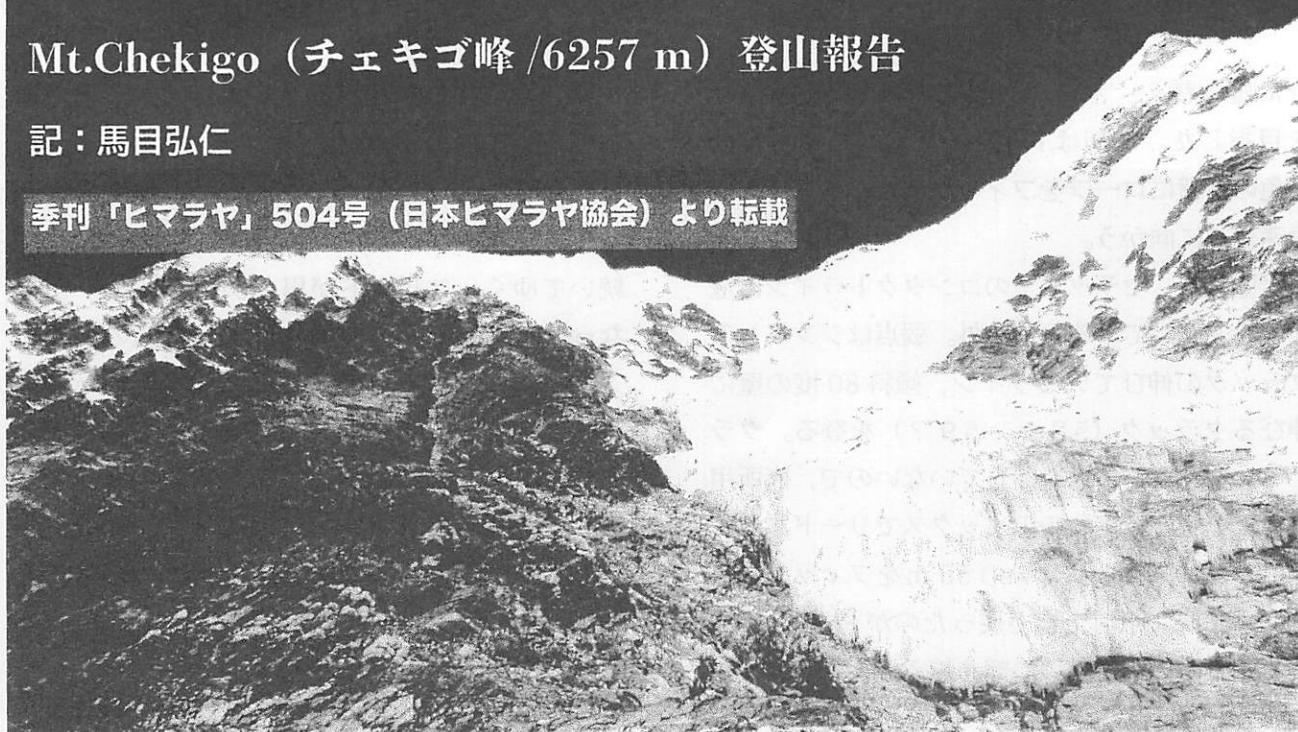


Mt.Chekigo (チェキゴ峰 / 6257 m) 登山報告

記：馬目弘仁

季刊「ヒマラヤ」504号（日本ヒマラヤ協会）より転載



【報告にあたって】

この隊の当初の正式名称は、「Mt.Chukyimago go (チュキマゴ峰) 登山隊」である。未踏で残っていた南面のクライミングを目標としていたが、足を踏み入れることなく断念。途中で目標を変更して、チェキゴ峰の南フェースへとトライすることになった。

次の目標とした、チェキゴ峰南フェースも頂上に達することは出来なかった。主稜線上にたどり着いた時点で体力的な理由で力尽きてしまった。失敗の報告ではあるが、後に続く方々の参考になれば幸いである。

【メンバー】

- ・馬目 弘仁（担当：隊長、医療）
- ・上田 幸雄（担当：会計、食料）
- ・黒田 誠（担当：記録）

【登山期間】

出国～帰国：2022年10月13日～11月15日

【登山概要】

・偵察

10月30日、BC (Na村、約4200m) から裏山に向かって適当に歩きはじめる。ヤクの放牧圏内から出ると不安定なスラブ帯となり、そこから丘陵を5000mまで上がってみた。草付きが続き、危険が少ないのでホッとする。ラウンドトリップして、おかげで下降中により歩きやすい道を見つ

※上写真 5,000m地点から見上げるチェキゴ峰（左）とバモンゴ峰（右）.JPG

けることが出来た。

10月31日、BCコック兼マネージャーに依頼し、カトマンズのエージェント事務所に依頼した要件（チェキゴ峰の登山許可取得）を確認する。結果はOK！ 後出しでも別峰の許可が取れることが可能とわかった。

11月1日、昨日の許可取得可の件を受けて、早朝から再度の偵察に行く。軽量化のためクライミングギアは持参しない。行けるところまで上がつてみるつもりで出発。前回の偵察ルートの緩い尾根は5100mで終わって、そこからいきなり壁となり、弱点は眼前の溝状のクラックだけとなっている。一瞬躊躇したものの登ることにする。その先は、簡単な岩稜が続く。なんと、途中からケルンが散見されるようになった。すでにここをルートにした隊がいるのだ。5400m、セラックの際まで到達。

・アタック

11月5日、AM06:00、BC発。晴天が続くことを期待してテントは持っていないことにした。念のためシュラフカバーとツェルトを用意。

岩稜の起点でロープを出す。私がまずは空身でリード、そしてフィックスロープを下降、それから二人してユマーリング。ゆっくりだったが順調に偵察最高地点（5400m）まで上がる。そこにトレッキングシューズをデポ、高所靴とクランボ

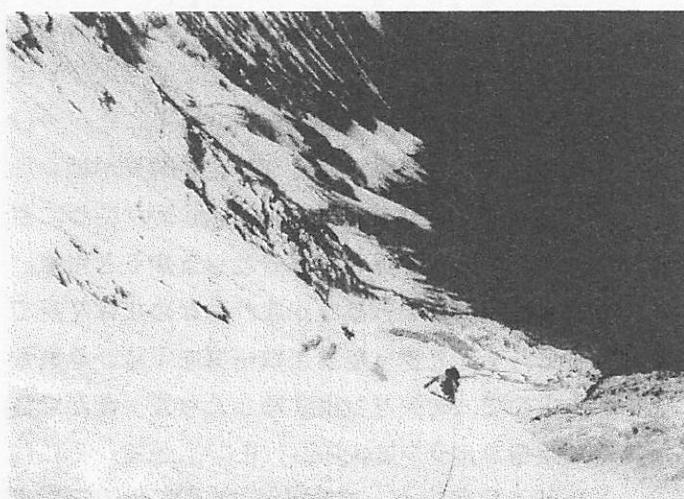
ンに履き替え、さらに一段上の台地（5500 m）を目指した。時刻はPM12:30。ここから奥の灰色の岩壁にロープをフィックすべきと考えて早速登りに向かう。

岩壁の端、セラックとのコンタクトラインは危険にハンギングしているので論外。弱点はシンハンドクラックの伸びているライン、傾斜80度の壁に伸びるクラック（5.8+～5.9?）を登る。クライミングシューズは持参していないので、高所用登山靴を脱いでウールのソックスでリードすることにした。ほぼいっぱいの55mをフィックスして懸垂下降。氷河上まで戻ったのがPM15:30、まずはまずの成果だ。核心部を越えたという感覚があったので明るい気持ちでビバーク地にもどった。

・頂上へ

11月6日、AM02:45起床、AM04:30発。ユマーリングの待ち時間があるので時間差でビバーク地を出発する。ジャミングブーリーとブルージックコード、厚めのグローブ+高所靴ではなかなかのアルバイトだ。

AM06:00頃、昨日のアンカーに到着、夜明けとともに本日のクライミング開始だ。4級+くらいの緩い岩壁を40mほど、セラックに突き当たってからは岩壁とのコンタクトラインを2P。次は思い切ってセラックの上部に上がってみた。クレバスを迂回すると傾斜の緩い砂時計状が見えてくる。先はそう長くない。頂上には十分に行きつくと、その時は感じた。



主稜線直下の雪壁を登る黒田誠

30～40度の雪壁を延々とコンティニュアスで登る。ちょっとしたロックバンドで2回ほどアンカーをつくってビレイしてもらう。モナカ状の割と潜る雪質がやっかいだ。登れども先がさらに続いてゆく。スピードが思うように上がらなくなってきた。4～5歩進んでは荒い呼吸のためにストップ、なかなか主稜線が近づいてこない。標高差で300m程度の雪壁を登るのになんと4時間、とにかく足が疲れて、息が切れる。引いている2本のロープが異常に重く感じる。主稜線直下のセラック群が間近に見えるのに空との接線が遠い。

傾斜は50度ほどあるだろうか。ダガーポジションであがくのだけれどスッテップもアクセスも崩れてゆくのでとにかく厄介だ。下手をすると滑落しかねない。「アンカーをとらないとヤバくないか」と酸素欠乏状態の頭で考える。グサグサを慎重にトラバース、焦りは禁物だが呼吸を整える時間がこんなにも長く感じるとは。アンカーをつくることにして、黒田さんをビレイ。彼も苦しいそうに下を向いて喘ぎながらがんばっている。

時刻は、PM12時を10分ほど過ぎている。今朝方には、もうすでに登頂しているだろうと踏んでいた時刻だ。遅い。そしてこの疲労感は半端ない。ここから先にすすんでいいのだろうか。正直、この時はかなり後ろ向きに考えていたのだった。

登ってきた黒田さんが自然にビレイ態勢に入っている。この疲労で、まだ登るべきだろうか……「この先、あとどれくらいと思う?」「あと3Pくらいじゃないですか。そんなに遠くないですよ。」というような短い会話があって、口に出さない疑問を飲み込んでリードに向かった。

1P目、50mをノープロ、少し硬くなった雪面をダガーとダブルアクセス混じりで。2P目、40m、スクリューでランナーが1本取れたものの、嫌になるほどのランナウトだ。傾斜は70度ほど。黒田さんの位置から上部見通しを確認してもらってからアンカーをつくる。3P目、私たちの見立てが正しければこれで主稜線だ。5mほど



主稜線上に立つ黒田誠

登ったところでスクリューをセット、この先はどう見ても雪壁でプロテクションがとれそうもない。セラックの直下が最悪の雪質だった。アクスを何度も打ち込んでスカスカで決まらない。息も切れる。「落ち着け！」と何度も自分に言い聞かせるように、それこそ4点支持で登り切った。バンド状に這い上がった瞬間に倒れ込んでしまって顔が雪にまみれる。アドレナリンなど全く出でないし、辛すぎる。見上げると45度、10m弱のルンゼがまだ残っている。その上が主稜線(空)だ。考えず、ただもがいているうちにそこへ飛び出した。頭が機械的にアンカーをどうするか考えている。幅1mくらいの痩せた両雪庇のスノーリッジだ。スノーバーを縦に打ち込んで黒田さんを迎えた。

中国側(この主稜線はネパールと中国の国境)からの風がとても冷たい。たまらず、ビレイを時々さぼりながらジャケットを着込んだ。落ち着いてから少し辺りを見渡す。セラックが邪魔をしてチエキゴ峰の頂上は見えない。メンルンツェ峰が目の前に大迫力でそびえている。下には冰河湖が沢山ある。反対側に続く稜線のナイフェッジは大変そうだ、と、ほんやり考えていると黒田さんが上がってきた。まずはがっしりと握手。「頂上は、(行か)ないですよねえ。」という彼の言葉には全面的に賛成だ。いや、それよりよくここまでたどり着いたという気持ちが大きい。「ここまでだけ充実したよ。俺たち、十分がんばった。」と返事をしたと思う。彼の肩を数回強くたたいて健闘をたたえた。ここまで来れてちょっと嬉しい。

死力を尽くせば頂上に達することができるのかかもしれないが、そうすればこの主稜線上でビバークしなければならないのは確実だ。そうなれば、生きては還れないと考えていた。

・下降

主稜線上の滞在は5分ほど。写真を数枚撮ったのち、スノーバーを横に埋めなおして懸垂下降を開始した。先ほどからガスが上がって視界が悪くなっている。正直、怖い。

ここから先、V字スレットをつくって慎重に下りたいのが本音だ。この雪質なのでクライムダウンは出来るだけやりたくない、というか避けたい。途中からボラードを多用することにして、2度ほどそれで懸垂下降。40度以下の雪面では、セットしたロープをつかんで手すり補助にして、前向きにザクザクと歩いて下りた。これはなかなか良いアイデアだったと思う。真っ暗になる前には、下部セラック帯のところまで下りてくることができた。下降方法を素早く思いつけるデポジットを持っていること、それについては、自分を多少は誉めてあげてもいいだろう。

クレバスを回り込み、続く3mほどの垂直の段差を懸垂下降。岩の上に降り立ち、ロープをゆるめて解除、そして上を見上げた途端、時間差で岩がクレバスへ崩落した。立っていたマンホールのフタがいきなり外れたようなものだ。腰をしたたかに打ち付けてしばらく呻いてしまったが、そのまま奈落の底に落ちなくて本当によかった。

次はいよいよ岩壁帯2Pの懸垂下降だ。こういう作業は、何故かしっかり出来そうな自信がある。岩壁の懸垂下降を無事終了して冰河に乗り上がる。昨日のビバーク地はもうすぐそこだ。今日はここまで。もう動きたくない。月明りのビバーク地、二人とも立ったまま湯が沸くのを待つ。食欲はそれほどないけれど水分はしっかりとらなければ。疲れ切って言葉はかなり少なめだけど、ここまでちゃんと還ってきた安堵感にすっかり緊張がゆるんだ。時間を気にすることなく、飲んで食べてからシュラフに入る。

翌朝、日が上がって暖かくなってから起き出



5500m のオープンビバーク地

す。スローモーションのように体がゆっくりとしか動かない。お湯を沸かしてささやかな朝食をする。「気をつけて慎重に下ろう」と、互いに言い聞かせるような感じがなんだか可笑しかった。クライムダウンは出来るだけ避けて、ギアを惜しまず積極的に懸垂下降をしていく、と再度(ちょっと昨晚の自分が恥ずかしいけれど)確認しあう。PM1時頃、BCに到着。

・敗退の要因について

『チエキマゴ峰について』

高度順化の不調、その後の発熱と呼吸器系の不調による登山日数の減少により、アプローチと偵察に日数のかかるチエキマゴ峰へのアタックを断念した。現地での症状から、コロナに感染していた可能性を医師から(帰国後に)指摘されている。

『チエキゴ峰南フェース』

主稜線上に達した時点で、体力的にかなり消耗していたためにそこから直ぐに下降する判断に及んだ。天候はすこぶる良かったので、敗因は全てクライマーの側と言える。

今季のモンスーンはかなり長引いたそうである。10月半ばまで悪天候が続き、そのために積雪が通常より多かった。不安定なモナカ雪に足がとられてかなり消耗し、かつてサガサの雪質でスピードが上がらなかった。

『高度順化の不足』

5100mでの1ビバーク、5400mへの1往復の順化で本番のアタックとなった。若干、高度順化活動が不足していたことが、スピード鈍化の原因かもしれない。

・付記

『登山許可取得について』

今回は、BCからの電話連絡のみで別峰の登山許可を取得することができた。カトマンズのエージェントに連絡をいれてから2日後にはOKとなつた。トレッキングパーキットのピークだけではなく、エクスペディションピークでも可能ということであった。しっかりしたエージェントを使えば、このようなことが可能である。エージェントへの手数料はUS\$300を支払つた。

『天候について』

今季のポストモンスーンは、かなり天気が悪かったようである。特に10月中旬まではカトマンズでも雨が多くなったようだ。私たちがカトマンズ入りした10月15日頃から晴天傾向となり、帰国するまでの約1ヶ月間続くことになった。近年言われていることだが、10月はあまり天気が良くないようである。

